

従来キリスト教界が説いてきた「信仰義認の福音理解」では、信仰者の歩みの中にたくさんの認知的不協和が生じてしまう。もし被造物管理の神学に生きるなら、そのような問題は一挙に解消される。この講演では、「被造物管理の神学」を提唱している筆者が、自らの歩みを振り返りながら、10の変化を訴えている。本資料は、2013年秋に大野キリスト教会の修養会において語られた原稿を修正加筆したものである(2013年11月)。

認知的不協和から解放されるのか

疑い・不安・戸惑いから、自由・喜び・創造的な歩みに変えられる

ごあいさつ

この度の教会修養会に大勢の方々にご参加くださり、大変うれしく思っております。半年ぶりに、皆様に講演できる幸せを深く感じております。

東日本大震災以降私は、「キリストは、墮落によって失われた被造物の管理権をキリスト者に回復された」というヘブル人への手紙2章のメッセージを、いろいろな場所で講演してきました。このメッセージは、少しずつですが、日本の教会に受け入れられてきているように感じております。

2月の教育セミナーでは、「現代のキリスト教はパラダイムシフトが必要である」と、かなり挑戦的なテーマで講演をしました。カトリックからカリスマまで、日本のキリスト教界にぜひ「被造物管理の神学」を届けたいという切なる祈りから生まれた講演でした。その流れを受け今日は、「パラダイムシフトが起こると、キリスト者の歩みはどのように変わるのか」ということを話させていただきたいと思っております。

序(日本のキリスト教界は変わりつつあるか?)

本題に入る前に、一つの文章を紹介させていただきたいと思っております。それは、JEA神学委員会担当理事の日本ホーリネス教団内藤達郎牧師が「福音の再確認」という題で書かれたメッセージ(JEAニュース、2013年9月、44号、1、8頁)です。大変感動しましたので、少々長くなりますが、そのまま引用することをお許しください。

創世記1章26節によると神さまは神さまのかたちに人間を造られました。神さまは神さまのかたちに人間を造るほどに、人間の私たちに信頼し、期待して造られ、そして、この世界を治めてほしいと願いました。海の魚、空の鳥、家畜、地のすべての這うものを治めてほしいと願いました。つまり、この世界のすべて、神さまが創造された天と地とを治めるようにとの使命が与えられたのです。これは人間に与えられたのみか、夫婦に(27節)、そして、教会に与えられた使命です。この世界を治めるということは、神さまが第1日から第6日までの間に創造された思いと意図を理解して、神さまの願っている通りに治めるということです。

しかし、この世界は神さまが願っているようには治められていません。・・・

この使命を果たすはずの人間アダムとエバが神に従わず、自分の考えを優先して、自らの命のみか、この世界の命を損ない始めました。そこで、神さまはこの人間の罪を赦し、この使命を果たす者に回復するために救い主を遣わすことを預言し、そして実現されました。救いは人間の個人的な救いと幸せのためではなく、この世界を治める者へと回復するためではないでしょうか。人はイエス・キリストを主としなければ神さまの思いに従ってこの世界を治める使命を果たすことはできません。

創世記1章26節～28節と3章を見ると、神より与えられた、天地を治める使命を果たすために、救いがあるということではないでしょうか。その使命に対し、教会が無関心であっていいはずはありません。私たちの教団も様々な出来事での世界への関心を神さまから持たされてきました。ローザンヌ会議でも宣教は伝道と社会的責任と理解されてきました。しかし、むしろ教会にはこの世界を治める使命があると理解すべきかもしれませぬ。・・・

全世界の人々に福音を伝えることの大切さは損なわれてはなりません。しかし、その目的がこの世界への使命を果たすためであることを土台になされる必要があるでしょう。もう一度福音理解を再確認し、牧師、信徒がそれぞれで考え、共に仕える時、閉塞感などというものと無縁になるでしょう。私たちがそのように生きること

で、その使命を果たす感動を次世代に伝えたいものです。これは歴史を刻んでいくことができる使命だからです。

先日私は、11月9日に行われる日本ローザンヌ委員会主催のシンポジウムの案内文書を手に入りました。その招きの言葉は、次のような文章で始まっていました。「2011年の福島第一原発事故に見るまでもなく、被造物は損なわれ、うめいています。人間は神から被造物管理を託されましたが、しばしば人間の業によって自然は破壊され、人間同士も傷つけあっています」。

私は、今年の7月には、秋田県の錦秋湖で開かれた「第46回東北教役者会」でご奉仕をさせていただきました。来月末に神戸の関西聖書神学校で講演することになっています。この神学校は、キリスト者のきよめを強調する日本でも最も有名な、伝統ある神学校です。このような学校に私が招かれるということは、普通では考えられないことでした。戦後70年を迎えようとしているこの時期、日本の福音派はむろんのこと、キリスト教界全体が大きな変革を迫られているのかな、と感じさせられています。

私にとっては、私が提唱している神学がどのように評価されようと、そのようなことはどうでもよいことです。日本の教会が、神様が期待しておられる使命を果たしてさえいれば、それで十分なのです。もし日本の教会と日本社会が、意識する、しないに関わらず、「神の国」における責任を果たしているのであれば、日本人の牧師として本望であるということです。もしそうでなければ、私には果たすべき責任がある、ということです。

教会の皆様には、私の心境をも知っていただき、私のためにぜひお祈りをお願いしたいと思っております。

前置きが大変長くなりました。そろそろ、本題に入りたいと思います。今日の講演では、私が提唱している「被造物管理の神学」は、現実のキリスト者の歩みにどのような変化をもたらすのかという点を明らかにします。神学は、神に関する学問であり、本来は一人称で語るものではないとの伝統があります。従来の神学体系を紹介するだけであれば、それでよいと思います。ところが、新しい神学は、それが本当に有用なものかどうかは、それがキリスト者の中にどのように受肉し、その生き様にどのように現れるのかを示す必要があります(Ⅰテモテ4:15-16)。そのようなモデル(サンプル)を見ない限り、人々はその神学の実像を把握できないのです。まさに、「木は実によって知られる」ということです。

そこでこれからは、私の中に起こった変化を話すような形で、講演を進めさせていただきます。

1. 神学に対する理解が変わります

被造物管理の神学は、まず私の神学に対する考え方を変えました。私は、福音派の「聖書信仰」という伝統の中で生まれ、育ちました。その信仰は、聖書＝教理＝神学という考え方でした。つまり、聖書の教えは、教会が教える教理体系と同じであり、それはまた福音派の神学と同じだと教えられました。従って、聖書的な神学はただ一つしかなく、それは絶対的な真理であり、永遠に変わらないと考えていました。それゆえいつも、私には正統派意識があり、違った神学的な書物を読むときはあまり影響を受けないようにと、警戒心をもっていました。リベラルになったとか、信仰がおかしくなったなどと批判されないように、ずっと注意してきました。

しかし、被造物管理の神学に立ち、この考えは大きく変わりました。聖書は、神が歴史の中で、その時その時の神の民の必要に応え、神の御心を啓示された記録です。それは当然時代の衣をまとっています。教理は、聖書からその時代的要素と個別的要素をはぎとり、ある神学的なテーマのもとに整理・統合されて出来上がるものです。しかし、教派的な伝統に色濃く染まっています。さらに神学とは、聖書の啓示的真理と整理・統合された教理の二つを、キリスト者それぞれが自分の置かれた状況の中で応用した「体系的な知識」に他なりません。

従ってそれは、キリスト者それぞれの信仰の歩みに深く関わっており、皆違っているはずですが、神学は、絶対的なものではなく、相対的かつ個別的なものです。被造物管理の神学は、全被造物を視野に入れた信仰生活の中で、一人一人のキリスト者が築いていくものです。当然多様性に富み、創造性豊かなものとなります。むろん神学は、聖書と教理に結びついている限り、その根本は客観的・普遍的なものです。しかし同時に、その人の日常の歩みに密接に結びついたもので、変化に富み、自由闊達で、バラエティーに富んだものとなるでしょう。

キリスト者の間で神学の違いを認めることができるようになると、他のキリスト者に疑心暗鬼になったり、裁くような姿勢はなくなります。その人の賜物とよさを理解できるようになり、その人の貢献を評価できるようになります。立場や持場が違うということは、管理内容が異なるということです。すると、神体験も違ってきます。聖書には、神に対するタイトルが 340 以上も出てきます。アブラハムにとっては「神の友」、モーセにとっては「契約の神ヤハウエ」、ダビデにとっては「羊飼ひ」、イザヤにとっては「イスラエルの聖なる方」、エレミヤにとっては「万軍の主」でした。管理の内容の違いが違った神体験をもたらし、異なったタイトルを使わせたのです。

2. 自然界に対する見方が変わります

第二に、自然界に対する見方が変わりました。被造物といえば、この地球の自然界、さらには天の高いところにある宇宙が頭に浮かぶことでしょう。へブル 2 章においても(それは詩篇 8 篇を読むと明らかですが)、天の星空の観察から話が始まっています。被造物の管理は、むしろ自然界の管理を含みます。人は自然の恵みをたくさん受けていますが、その管理となると、多くの問題に対処しなければなりません。大気汚染、地球温暖化、異常気象、さまざまな自然災害、エネルギー資源、発展途上国の資源に関する諸問題、…。これらの難題の対応には、地球形成学、地球環境学、地震学、地質学、気象学などなど、いろいろな学問の助けが必要です。どのような分野においても、被造物管理者には、最先端の研究成果を土台にして管理することが求められます。

従来の神学では、被造物は人間の罪ゆえ虚無に服することになった(ローマ 8:20)、この世はサタンの支配下にあり滅ぼされるべきものである、自然災害も神の裁きであり、この天地はキリストの再臨の時にすべて滅ぼされる、そういう理解でした。しかし、新パラダイムでは、被造物の贖いが期待されています。新天新地が、今の天地とどのような関係にあるのか、それは分かりません。しかし、「贖われる」と言われている以上(ローマ 8:19-25)、何らかの関連性があるはずで、そのように信じて、この自然がこれまでとは全く違うものに見えてきました。

従来のパラダイムでは、宗教と科学の対立・対話・調和・統合といったことが大きな問題でした。しかし、被造物管理の神学に立つと、宗教と科学の対立は全く意味のない問題となります。すべての科学的な営みは時代の産物です。科学における今日の標準理論が明日も変わらない、という保証はありません。にもかかわらず、その時その時の最先端の情報に基づいたベストの理解です。神より管理を託されたキリスト者としては、とりあえずすべての科学的な成果をそのまま受け入れ、その科学を利用する以外にありません。真理追求の学問的世界においては、その学問の自律性を認めねばなりません。キリスト者、非キリスト者の区別をする必要はほとんどありません。キリスト者がそのような世界に立ち入り、護教的な立場から発言することは避けるべきです。科学の歴史はそのことを明確に教えています。もしキリスト者が正しい姿勢で科学に関わるなら、科学者もまたキリスト教信仰を見直し、相互に健全な関係が築かれていくこととなります。

3. 社会や自分に対する見方が変わります

三番目に、社会(人間や自分を含む)に対する見方が変わりました。被造物というと、人間は含まれていないかのような錯覚に陥ります。むしろ、これは間違いです。神が創造された最高の被造物は人間です。人間は、最後に「神のかたち」に造られ、他の被造物とは違った位置に置かれました(創世記 1:26-28)。このように言うことは、人間の高慢さを表わすものではありません。このことは最後の 10 番目に詳しく述べます。被造物の管理とは「仕える」ことを本質としており、上からの目線ではなく、下から、あるいは横からの目線によってなされるものです。

なお、人間がどのように造られたのかというプロセスに関しては、現在キリスト者の生物学者の間でも多くの論争が展開されています。有神論的進化説なのか、インテリジェント・デザイン説なのか、古き地球説なのか、若き地球説なのか、その点については、今後シリーズで講演する準備をしております。期待してお待ちください。ただ、今は方向性だけを申し上げます。キリスト者は、特定の考えでないといけないという護教的な立場は取らない方がよいということです。キリスト者である限り、無神論的な進化論はあり得ません。有神論的な前提に立っている理論であれば、すべてに対してオープンな姿勢をもっているのがよいでしょう。

管理の最初にして最大の仕事は、被造物としての「私」です(Ⅰコリント 9:24-27)。私に関わるすべてのこと、健康、所有物、才能、時間、信仰、職業、さまざまな身の回りの出来事が被造物管理の出発点です。自己管理がで

きないキリスト者にとって、他のものを管理するなど言うことは不可能です。これまでの私は、自己管理と言えば、自分の霊的状态の管理であり、「キリスト者のきよめ(聖化)」という視点から考えることがほとんどでした。しかし、もし被造物の管理という概念から取り組むなら、多くの点で違ってきます。おかしな縛りから解放され、自由に創造的な歩みができるようになります。

さらにこの私は、周囲の多くの方々、家族、親戚付き合い、近所付き合い、教会生活、これらに加えて地方自治、国家、国際社会、宇宙空間に至るまで、さまざまな関係をもちながら生活しています。これまでキリスト教界は、ある特定の社会問題を、「社会的責任」として取り上げてきました。例えば、天皇制反対、靖国反対、憲法改悪反対、原発反対、などなどです。最近のケーブタウン声明も、こういう流れの中で「キリスト者の社会的責任」を明らかにしています。むろん、これらのことは大切なことです。

しかし、被造物管理の神学から見ますと、それらの問題はごく一部の事項に過ぎません。その責任内容も一種のパターナリズム化した理解に終始しているように私には見えます。被造物管理というパースペクティブで人間社会に起こるすべての問題に関わっていこうとするなら、もっともっと違った広がりが出てくるはずで、キリスト者は、現代の人類学、社会学、医学、心理学、哲学、歴史学、経済学、法学、政治学、芸術学、国際関係学、工学や科学技術、宇宙学など、ありとあらゆる社会の問題に取り組んでいる学問に、真摯に耳を傾けねばなりません。あるいは、そういう分野で活躍しているキリスト者は、神の国の管理者として声を上げていかねばなりません。よいことには神を賛美し、困難な問題には共に責任を負っていく、それがキリスト者の姿です。そのような努力もしないで、被造物管理などと唱えても、空念仏以外の何ものでもありません。

この世はサタンの支配する、滅ぶべき無価値なものである。世と世にあるものを愛するな。エルサレム(信仰の都)にとってアテネ(異教の学問の代表的な都市)に何の益あらんや。こう言う考え方がこれまでのキリスト教界の支配的空気でした。むろん被造社会には、そういう側面がないわけではありません。と同時に、キリストはあらゆる領域における主権者であり、現実はこの世界に起こっている事柄を支配しています(マタイ6:25-30、テトス3:1-2)。このキリストの支配権の基で、キリスト者はキリストとの協働管理者として責任を負っているのです。

4. 人間の価値に対して見方が変わります

四番目に、これは三番目と深い関わりがあるのですが、人間の価値に対する評価が大きく変わりました。従来のキリスト教神学は、アダムとエバが罪を犯して以来人間は全的墮落に陥った者であり、全く無価値な存在であると見なしてきました。それは、アウグスティヌス以来の伝統でした。その結果、学問や芸術、スポーツや娯楽、社会倫理や宗教は、何一つ益はないと考えるようになりました。これでは、キリスト者は世捨て人になるか、キリスト教村社会に逃げ込む以外、生きる道はありません。プロテスタントには修道院はありません。そこで、精神的なバリアを張り巡らし、キリスト者共同体に逃げ込み、何とか信仰生活を全うしようとしたのです。

しかし、被造物管理の神学では、墮落後の人間も「神のかたち」を持ち続けているとの前提に立ちます(創世記5:3、ヤコブ3:7、9)。人間は皆、無自覚ではありますが、それなりに神から託された被造物管理の責任を果たしているのです。キリスト教の伝統は、人間のわざをすべて悪と見なす傾向があります。しかし神は、墮落後も人間の自由意思を尊重され、人間の活動を許容しておられます(創世記9:6、I ペテロ2:13-17、ローマ12:14-18)。

むろんここで私は、キリスト無しでも人間は救われる、などと申し上げているわけではありません。すべての人は罪を犯し、キリストの贖い無しには救われることはありません(使徒4:12)。しかし、墮落後も、人間は人間だったのです。出産には苦しみが伴い、いばらやアザミの真ただ中で耕作することを余儀なくされたのが墮落後の人間です(創世記3:16-19)。エデンの園とは違いますが、それでもすべての人は被造物の管理責任をそれなりに果たしています(創世記4:17-24)。

キリスト者は、そのような一般の人々が果たしている管理の実を享受しながら生きています。神は、この世界のすべてを支配し、すべての一般的な文化的営みを、キリスト者にも備えてくださったのです。そう見るのが被造物管理の神学です。キリスト者はスポーツや芸術、趣味や世界旅行、仕事や学問を神様から与えられたものとして、もっともっと楽しんだらよいと思います。親は子どもが幸せになってもらいたいと願っています。人を造られた神が、人間以上に、ご自身の子たち(キリスト者のこと)に同じような思いをもっていることは間違いありません。

実は、私がこのようなことを申し上げなくても、多くのキリスト者は、旅行を楽しみ、サッカーに一喜一憂し、東京オリンピック開催を喜んでいるのです。音楽会に行き、同窓会を楽しみ、ゴルフに興じているのです。営利主義の会社に勤め、世俗の学校教育を受けています。無意識かもしれませんが、日本政府と社会から多大の恩恵を受けているのです。これらは、従来のキリスト教神学では、認知的不協和をもたらすはずだったのです。それがもしそうでなかったとしたら、そのキリスト者はこれまでの神学を真正面から受け止めてこなかっただけなのです。もし本当に古いパラダイムを真面目に受け止めていたら、人間としての歩みは実際には不可能だったはずで、本当は、被造物管理の神学に立って初めて、このような認知的不協和から解放されるのです。

5. 教会に対する意識が変わります

第五番目に、教会についての意識が変わりました。聖書の「教会」という言葉には、それぞれの地域に形成されている「教会」を指す場合と、キリストの体なる普遍的な「教会」を指す場合があります。前者は、エルサレムの教会とか、エペソの教会、コリントの教会などを指します。後者は世界中に広がっているカトリック、ギリシャ正教、プロテスタントのすべての教派を含め、さらにすべての時代を包含した教会を指しています。従来の神学では、個々の地域教会の重要性が強調され、普遍的な教会は軽視される傾向がありました。

しかし、被造物管理神学では、イエスの語られた「神の国(神が王として全被造物を支配している)」が信仰の中心に置かれます。すると、この神の国の中でイエスと共に被造物を治める「神の民としてのキリスト者全体」がより重要になってきます。つまりキリスト者は、自分の属する地域教会を大切に、そこを出発点にしながらも、絶えず「普遍的なキリストの体なる教会」(エペソ 1:22-23)という意識を広げていかねばなりません。今の時代には、「グローバル化」とか「国際化(インターナショナル)」などということが叫ばれています。教会こそ、まさにそういう言葉がふさわしい共同体です。宇宙の創造者である神の視点に立てば、「宇宙化(コスモロジカル)」とか「普遍的な(ユニバーサル)」という意識の中で、全被造物を管理していくのがキリスト者なのです。

私たちは皆、大野教会に属しています。自分たちの教会を誇りに思い、多くの方々に見てもらいたいと思っています。何でもベストのものをこの世界に提供したいと願っています。それゆえ私たちお互いは、教会内に留まるだけであってはいけません。私たちが所属する日本バプテスト教会連合、あるいは相模原の地域にある諸教会に大きく貢献したいものです。さらに、海外の邦人教会から日本福音同盟へ、もう一步進んでエキュメニズム(世界教会一致)運動に、深い関心を広げていかねばなりません。教会はまた、「神の国」の民として、全人類に目を向けていかねばなりません。この社会に起こってくるあらゆる問題に対処する共同責任を負っているのです。教会は、小さな神学的問題で対立しているような時ではありません。国の利害や対立を越え、真に平和な世界に自らをささげていくことこそ、神の国の民に託された責任なのです。

6. 信仰生活が変わります

六番目に、私の信仰生活が大きく変わりました。従来の神学では、神の子になるとは、義と認められて天国行きの切符を手にするということでした。救われた後はせいぜい、罪を犯さないで伝道に励むか、あるいは教会の奉仕を忠実に果たす、そんな信仰生活のイメージでした。しかし、被造物管理の神学に立って以来、キリストがこの地上に起こるすべての事柄を支配しておられる、自分はそのキリストの働きにあずかるよう招かれている、そういう感覚がいつも私自身につきまとっています(エペソ 5:20)。イエスはあるとき、こんなことを言われました。「子は、父がしておられることを見て行なう以外には、自分からは何事も行なうことができません。父がなさることは何でも、子も同様に行なうのです。それは、父が子を愛して、ご自分のなさることをみな、子にお示しになるからです」(ヨハネ 5:19-20)。イエスが言われた言葉は、今の私の歩みにピッタリ当てはまります。

しかも神は、キリスト者がキリストと共に被造物を管理するとき、その一つ一つの働きに豊かな報いを備えておられます(マタイ 6:6、18、コロサイ 3:23-25、ヘブル 6:10)。昔よく、瞑想とか黙想を重んじるキリスト者たちが「doingではなく、beingが大事である」と叫んでいました。霊性を重んじる運動も分からないではありません。しかし私には、doingから離れたbeingを考えることができず、いつも認知的不協和を起こすのが常でした。物事をどのようにとらえ整理するかは個人によって違います。私自身は、イエスが語られたたとえ話の方がピンとききます。

イエスはたとえ話の中で、10 ミナ儲けた人には「よくやった。良いもべだ。あなたはほんの小さな事にも忠実だったから、十の町を支配する者になりなさい」とおほめになりました。5 ミナを儲けた人には「五つの町を治めなさい」と報いを与えました(ルカ 19:17-27)。よき管理者には、さらに多くの管理すべきものを神は天で用意されていることが分かります(I ペテロ 1:4)。パウロは、天において栄冠をいただくことを期待して、信仰の道を走り続けました(ピリピ 3:14)。葬儀のとき、弔辞などで「天国でゆっくりお休みください」というのは、ちょっと違うのかなと感じることがあります。働きのご褒美は働きなのです。ある講演会でそんな話をしたら、管理に大切なのは、ゆっくり休養を取るとことではないでしょうか、と質問されたことがあります。その通りですよ。私は、よき管理者は休み時間をきちんととるでしょうね、と答えておきましたが・・・。

また、祈りの意味が変わってきました。キリスト者は、キリストのご支配の中で管理責任を果たします。従って、キリストのみ心を伺うことが当然で、祈らざるを得なくなります。これまでの私の祈りは、病気が治ることや、困った時の神頼み的な祈りが多かったと思います。とりなしの祈りにおいても、その種の祈りが大半でした。ところが今は、どのような状況でも、その真ただ中でキリストが働いておられるのですから、キリストが何をキリスト者に期待しておられるのか分かるようにしてください、という祈りが多くなりました(エペソ 6:18、I テサロニケ 5:16)。と同時に、キリストご自身が私のためにとりなしの祈りをささげてくださいていることを、日々実感しています(ローマ 8:34、ヘブル 7:25、9:24)。祈りほど自然ですばらしいものはありません。何も気負わず、神との親しい会話になりました。

さらに、聖霊の働きが、キリスト者の被造物管理の遂行において不可欠であることを実感するようになりました。これまで私は、聖霊は自分の内的なきよめにとって重要だと考えていました。御霊に満たされよ、御霊によって歩め、御霊の実を結べ、こういう御言葉が私の脳裏に叩き込まれています。その信仰は今も私の歩みの中心にあります。しかし、被造物の管理においては、キリスト者は聖霊の導きと助けをどうしても必要とします(ヨハネ 14:26、16:13-15)。被造物管理の働きは、本来神の働きです。神にしかできないことです。従って、その働きは「栄光と誉の冠」と言われています(ヘブル 2:7、9)。キリスト者はそのような働きに招かれたのです。聖霊の知恵と力によって全うさせていただく以外にありません。

7. 物事の対処の仕方が変わります

七番目に、物事の対処の仕方が変わりました。多くのキリスト者は、神はすべての事柄に御心を定めておられる。私たちはそれを祈りによって探り当て、そのことを忠実に行わねばならない、そういう歩み方をしていないかと思えます。しかし、「管理」という言葉を導入すると、すべては変わってきます。物事はすべて、何かが始まる前から神のご計画に従って決まっている、そういうわけではありません。キリスト者は、何も考えず、ただ神から言われたことだけをきちんとやっつけていけばよい、というのは管理ではありません。自分で考え、自分で責任をとるのが管理者です。私にとっては、「管理」というこのひと言が自分の歩みの中でストンと落ちたとき、自分の物事に対する対処法が大きく変わりました。

キリストが先頭に立って支配しておられるということは、キリストが私たちのなすべきことをすべて決め、命じていると考えることでしょうか。神は、人をそのように造られ、そのように行動することを期待されたのでしょうか。とてもそうは思えません。それでは、毎日の生活で認知的不協和を起こすことばかりになってしまいます。自分で考え、自分で責任を取る存在として造られたのではないのでしょうか。それが「神のかたち」に造られたという意味でしょう。キリストの贖いは、その管理能力を回復し、正しく使うことができるようにくださったのです。その特権を享受しながらすべての物事に対処することを神から求められているのです。

管理である限り、試行錯誤はつきものです。失敗から一番たくさんのかんことを学ぶはずですが。キリスト者は、御心症候群から解放されねばなりません。被造物管理は、キリストとの協働管理であると同時に、他のキリスト者との協働管理です。よき管理者になるには、仕事内容をよく知ること、他の人と上手に協力できること、組織のルールをしっかり身に着けること、そして自分自身の実相をよく自覚すること、などが不可欠です。境界線思考ではなく中心点思考、減点思考ではなく加点思考が求められます。他の方々の愛と寛容さに甘える体質、消極的思考や批判的精神、言い訳の繰り返し、被害者意識、感情的反応、自分のことしか目に入らない体質・・・そのような幼子のメンタリティーを捨てなければなりません(ヘブル 5:11-14、コロサイ 3:12-17)。

管理は、状況に応じて対応することが求められます。原理原則を大切にしつつも、臨機応変に振舞わねばなりません。時には、判断をしないという選択肢も重要になります。また、ユダヤ人にはユダヤ人のように、ギリシャ人にはギリシャ人のように振舞うことも必要です(Ⅰコリント 9:19-23,10:31-33)。キリスト者は、誰よりも賢い人たちであるはずですが、神がそのような働き人を期待されているのですから。

8. 宣教に対する考えが変わります

八番目に、宣教に対する考え方が変わりました。多くのキリスト者と教会が、停滞している日本の宣教状況に危機感を感じています。沼地のような日本の精神風土が宣教の邪魔をしていると感じることは、私にもよく分かります。しかし私は、宣教の障害を外に求めることはやめました。被造物の管理を託された者にとって、託されたものに対し不平を言うことはふさわしいことではありません。むしろ最大の障害は、キリスト者の福音理解にあるのではないだろうか。被造物の管理に思いを寄せれば寄せるほど、そんな風に見えてきました。

今の日本人のほとんどが、神やキリスト、罪の赦しや永遠の命、聖書や信仰などに関心を示さないことは事実です。残念なことですが、死後の世界、永遠の問題にはほとんど反応をしません。身の回りの出来事、物質、この世界の事柄にしか、興味がありません。キリスト者がそのような風潮を嘆いても、何も始まりません(コロサイ 4:5-6)。人々の実情を受け入れ、そこから出発する以外にありません。

人々の中に、神への関心を呼び起こし、罪の赦しと御国への希望を渴望させるには、キリスト者が自分の生き方を提示する以外にないのではないのでしょうか。もしキリスト者が「神の国」において被造物の管理を委ねられた者として真剣に生きるなら、周囲の人々は必ずその姿に心動かされるに違いありません。それは、子どもでも、若者でも、働き盛りの人々でも、年を取っておられる方々でも、同じでしょう(Ⅰテサロニケ 1:6-10, 4:12, 5:15)。そのように日々の歩みをして、神の働きの実在を証する以外、有効な宣教の手段などないのではないのでしょうか。

教会は、名の通った歌手や音楽チームを招き、立派な説教者に講演を依頼します。魅力あるチラシをつくり、プログラムにさまざまな工夫をして、伝道的な集いを企画します。たくさんの人々に集会に来ていただきたいからです。ということは、普段の音楽、その教会の説教者、通常のプログラムでは、人々を捉える魅力がないと告白しているようなものです。このようなイベント頼りの教会に、誰が魅力を感じるのでしょうか。誰が信用するのでしょうか。

9. 宗教に対する考えが変わります

九番目に、宗教に対する私の考え方が変わりました。私はこれまで、他宗教を異教で偶像礼拝であると断じ、対決姿勢を取ってきました。むろん、そのようなことを口に出すほど愚かではありませんが。

しかし宗教は、歴史の中で、それぞれの国民が社会秩序を守り、道徳的に生きていくのに大きな役割を果たしてきました。私は、被造物管理の神学に立って、初めて他の宗教をありのまま受け止めることができるようになりました。これまでの多くの戦争は、領土問題や経済問題だけではなく、宗教問題が微妙に絡んでいます。それは文明の戦いであり、民族の戦いであり、信念の戦いです。どの宗教も平和を志向しながら、平和共存が不可能になっています。キリスト者はこの事実を謙虚に認め、平和構築のため新たな神学を必要とするのです。

このことはむろん、他宗教の中にも救いがある、などと主張しているわけではありません。キリスト教の異端的な教えやカルト・マインドコントロールの世界を容認するというのでもありません。シンクレティズム(宗教混合主義)や宗教多元主義(どの宗教でも救いがあると考える)とも違います(Ⅰペテロ 2:1-2, Ⅰヨハネ 2:21-27, Ⅱヨハネ 7-11)。キリストの福音をあいまいにすることは、被造物管理の神学とは無縁です。

それぞれの宗教は、人間の道徳的、倫理的な生き方を保つため、一定の役割を果たしています。それは、墮落によって傷ついています、人間が「神のかたち」に造られた、その一部でしょう。それぞれの宗教が歴史の中で果たした役割をきちんと評価することは、被造物管理を託されたキリスト者にとって大切なことです。教義と儀式、ライフスタイルなどが異なっても、特定の問題においては共闘する余地がたくさんあります。東北の被災地では、クリスチャンの支援集会に現役のお坊さんたちがお出でになっていました。カルト問題の対策では、もう20年

も前から、宗教を超えた宗教者たちが連帯してさまざまな活動を展開しています。宗教者平和の会なども大切にしていける必要があります。

10. 仕えるという生き方に変わります

最後に、キリスト者の生き方とは、「仕える」という姿にあることを学びました。この「仕える」という姿勢こそ、被造物管理において最も大切な点です。この点があいまいになると、すべては台無しになってしまいます。被造物管理の神学などというと、人間中心主義の高慢な神学と批判されるかもしれません。しかし、実際には、全くその逆です。イエスのように身を低くして仕える姿こそ、キリストによって贖われたキリスト者の究極の姿です。

創世記1章26節及び28節では、被造物に対し「支配せよ」という言葉が使われています。この言葉には「管理する」という意味があります。従ってこれまで、「管理する」という訳語を使ってきました。しかし、キリスト者の「支配」の実態は、「管理」というより「仕える」ことにあります。ペテロは、「それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい」(Iペテロ4:10-11)と述べています。管理するとは、結局仕えることなのです。

この点を明らかにされたのは、イエスご自身です。イエスは、神の国におけるリーダーとは、仕えられる者ではなく、仕える者であると説かれました(マタイ20:25-28)。実際イエスは弟子たちの足を洗われ(ヨハネ13:4-17)、生涯仕える姿を取り続けられました(ピリピ2:6-11)。この世の考えでは、王であり支配者である者が奴隷の姿を取ることはありません。ところが神の国においては、「王であること」と「奴隷であること」とは矛盾しません。矛盾しないどころか、それがスタンダード(標準)なのです。もしあなたが、神の国の中で歩んでいるならば、それは徹頭徹尾仕えることに尽きる、と分かるでしょう。神の国とは、この世の標準では全く不可解な、特殊な世界です。神が被造物を尊重し、それに仕えておられるからです。

キリストは神の右の座に座し、人間社会あるいは自然界のすべてを統治しておられます(マルコ16:19、使徒7:55-56)。しかしそれは、人間の自由意思を尊重され、自然の法則に仕えながらの統治です。キリスト者は、このキリストの統治像に倣って、キリストとの協働統治する者です。キリスト者は、キリストの統治されているお姿に学びながら、すべての被造物に喜んで仕えていきます。自分から始まり、家族に、教会に、すべての人々と社会に、自然界のすべてに。

おわりに

これまで、被造物管理の神学に生きた結果変わった10の事柄をお話しました。最後にこの「変わる」という言葉の意味を確認し、私の話を終わらせていただきます。

私はこれまで、「パラダイムシフト」という言葉をしばしば使ってきました。この「シフト」という言葉は、あるものから他のものへ乗り換えるということを意味します。そのため、従来のものはだめで、新しいもののみが正しいというような印象を受けます。しかしそうではありません。たとえ、天動説から地動説に代わったとしても、実際の人々の生活はほとんど変わりません。どちらの見方をしても、満天の星空を楽しみ、星座に遊ぶことは同じなのです。それは、ニュートン力学がアインシュタインの相対性理論に代わっても、同じことです。

ではなぜパラダイムシフトが必要なのか、そう問われるかもしれません。それは、地動説でなければ近代の天文学は成り立ちませんし、相対性理論でなければ現代の量子力学や宇宙起源論には到達できないのです。普通の人が日常生活を送るのに、素粒子の世界にまで首を突っ込む必要があるわけではありません。

それは、神学の分野でも同じです。新しい神学は、従来大切にしてきた信仰の奥義を破棄させるようなものではありません。むしろその本当の意味を明らかにし、その中で大きく成長していくために役立つはずなのです。これまで、聖書にはこう教えられているけれど、自分にはできない、うまくいかない、違和感を覚える、そう考えていたことはないでしょうか。そのような事柄を、新しいパラダイムに立って見ると、ああそうだったのか、そういうことだったら私にも分かる、そうなることが被造物管理の神学なのです。

お互いの信仰生活を振り返り、そのような新しい歩みになることを期待しつつ、私の講演を終わらせていただきます。ありがとうございました。